とうとう坂井先生の『わかるように伝えていますか』が60回を迎えました！！！１ヵ月に１回ペースなので、丸５年ですね！坂井先生！ありがとうございます！さすがに５年にもなると、あらましをご存じない方もたくさん居られるかと思います。元々は「療育の重要性」と言うモノを、今よりも５歳も若い僕達が言ってもなかなかご両親に伝わらない事も多いと感じて坂井先生にコラムをお願いしたのが始まりです。毎月書き下ろしですよ？！祝60回！！いつか本にしようww　　久田

第 60 回『わかるように伝えていますか』

香川大学　坂井　聡

今回は、なぜ、コミュニケーション手段の確保が遅れるのかということについて考えてみることにします。コミュニケーションすることは大切なことだとわかっているのに、なぜか、遅れてしまうのです。

これまでの重度の表出障がいのある人のコミュニケーション手段の確保については、早期発見、早期療育を背景にして、その人の「障がい」に焦点が当てられ、その結果、訓練等を実施して、「障がい」そのものを克服し、改善するという発想が強かったと考えられます。これをコミュニケーション障がいという点から見てみると、次のような背景が考えられるのではないでしょうか。

ひとつは、コミュニケーション手段を提案し指導できるスタッフの不足です。コミュニケーションエイド等に代表されるようなコミュニケーション手段を使ったコミュニケーション支援が日本で紹介されてまだ歴史も浅く、実践してきた人がそのノウハウを紹介し、その効果を共有するまでには至っていないということでしょう。大学等でも AAC といったことを丁寧に教えているところも少ないと考えられます。そのため、まだ専門家が少ない状況だと言えるのです。これが、取り組みを躊躇させる原因の一つと考えることができます。

二つ目は、障がいのある子どもの場合、コミュニケーション訓練に比べて、身体的、医療的な介入に焦点が当てられることが多く、コミュニケーション支援について、その導入を考える機会がないという現実です。医学的な側面や生活するうえで必要とされる日常生活動作などが重要視されることが多いということなのではないかと考えられます。

三つ目は、コミュニケーションエイド等の導入が、音声表出の発達を妨げるのではないかという誤解です。安易に機器等を使ってコミュニケーションできるようにしてしまうと、出るはずの音声が出なくなってしまうのではないかと考えてしまう人が多いということなのです。このような考えは、訓練の場面でも聞きますし、学校の教育場面でも聞きます。また、保護者から聞くこともあります。しかし、この見解に対しては、子どもたちにとって双方向のコミュニケーション・システムが利用可能な状態であるならば、コミュニケーションエイド等の導入も音声言語表出の発達を促進するという主張もあるということを忘れてはいけません (シルバーマン、1995)。

このような三つの理由が、コミュニケーション障がいをもちながらも、今使うことができる能力とテクノロジーの力で、コミュニケーション能力を最大限に発揮し、今の生活を創っていくというような発想を妨げていたと考えられるのです。このような状況は何とかしなければならないと思います。支援目標や教育目標などを考えるときにもコミュニケーションは大切なものだからです。

次回は、支援目標、教育目標とコミュニケーションについて考えてみたいと思います。

坂井聡先生の紹介

（プロフィール）

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。 2013年より教授に就任。

（著書）

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など